

潮崎神社の建造物 松永の発展と共に

松永駅に降り立つと、南にはかつての塩田跡が、商業地・住宅地として生まれ変わり、新しい松永の顔を見せています。駅前には、本荘重政の銅像が南面して建ち、自らが開いた松永塩田の変容を見つめています。

南東の山腹には、重政の菩提寺・承天寺が望め、町裏川沿いの古い町並みを南下した神明端に潮崎神社が鎮座しています。

1663年（寛文3年）、松永塩田築造の際、柳津にあった社を重政が現



拝殿(左)に続く本殿(右)

在地に移し、塩浜の鎮守としたのが潮崎神社の創建と伝えています。その時、今津の剣神社の分霊を合祀したため、明治の初めまで剣大明神と呼ばれていました。

境内入り口には、1700年（元禄13年）寄進の鳥居があり、それに続く1716年（正徳6年）の銘が刻まれた石橋を渡ると、右手に南面して拝殿と本殿が建っています。

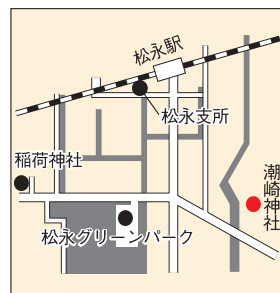
現在の本殿は、1667年（寛文7年）と1710年（宝永7年）の棟札の写を伝えています。様式上、1710年の建立と考えられます。

建物は檜皮葺の千鳥破風付き入母屋造・平入りで、桁行3間、梁間2間に向拝1間が付属しています。

内陣を除く外観には、三間社の本殿



十二支の透かしの彫刻



では珍しく、すべて角柱が使われています。軒下の墓股には十二支の彫刻が透かしで入っていますが、外観の総間数が10間のため向拝と内陣を加えて12としています。向拝の虹梁には、象の丸彫の木鼻を付け、手挟は雲と波の浮彫が施されています。

その他、細部に至るまで堅実な優れた手法がうかがえ、後の補修もほとんどなく、保存状態は極めて良好です。

祭礼は陰暦8月28日で、その前夜には盛大に煙火祭（花火大会）が行われていました。満潮を待つ、みこしは境内西側に造られた雁木の船着場から船に乗せられ、西町の稲荷神社へ渡御しました。その間に花火が打ち上げられたと言いますが、残念ながら今は見ることができません。

（1999年2月号に掲載）

今津宿① 中世末期からの宿場

福山市内では唯一の宿場町だった「今津宿」を2回に分けて紹介します。古代山陽道は、神辺から駅家を通り府中へぬけていましたが、中世以降は海岸沿いの街道が整備され、近世の西国街道へと発展していきました。

『小早川隆景書状』には「今日今津江着候」とあり、『中書家久公御上京日記』の天正3年（1575年）4月1日の項に「今津の町、四郎左衛門といへる者の所に一宿」とあるのをみると、中世末期には今津が宿場としての機能を果たしていたことが伺えます。



薬師寺

江戸時代に入ると、今津は西国街道の交通拠点として発展し、神辺宿と尾道宿の中間の宿駅として、本陣を中心に宿場町が形成されていきました。本郷川に架かる吾妻橋を西へ渡ると、かつての今津宿に入っていきます。建物はほとんど新しく建て替えられていますが、間口が狭く奥行きが長い敷地に往時の町並みが想像できます。

まず、右手の山腹に薬師寺が見えてきます。新熊野山東方院と号し、次号で紹介する蓮華寺とともに剣大明神の神宮寺でした。長い参道を上り、山門をくぐって境内に入ると、右手に今日ばかりひとも年よれはつしぐれと刻んだ円型の芭蕉句碑があり、左下に「羽州（名古屋の俳人）謹書」、裏面には「明治41年の晩春に桃州（地元の俳人）の門人が建てた」と記されています。宿場町だけに各地のさまざまな文化人が訪れました。薬師寺で句

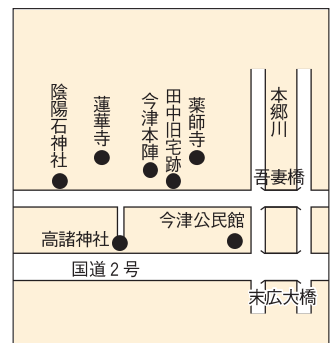


今津宿の入口

会が盛んに開かれたのも、頼山陽をはじめ多くの文人が立ち寄ったのも、そのためです。裏山の墓地には、江戸末期の私塾「大成館」の創始者、三吉傾山・冠山の墓が並んでいます。

参道入口から少し西に行くと、日本彫刻界の巨匠、平櫛田中の旧宅跡を示す石碑が建っています。井原の田中家から養子に入った田中は、少年の一期をここで過ごしました。その代表作「鏡獅子」は国立劇場のロビーに飾られており、福山駅前の「五浦釣人」も田中の作品です。

今津の宿場町は東西約600mの範囲に広がり、各所に文化的な香りを残しています。今回は残りの西半分を紹介します。



（2000年1月号に掲載）

今津宿②

本陣を中心に栄えた宿場町

前号で紹介した平櫛田中旧宅跡を少し西へ進むと、右手に今津本陣跡の坂道と表門が見えます。石垣で囲まれた広大な敷地に昔日の本陣の名残がうかがえ、市の史跡に指定されています。宝暦年間（1760年頃）の毛利藩『中国行程記』には「此辺昔海ニテ汐入テ瀉之所、寛文中（1661）1673）開作ト成、往古ハ往還當初ハ山麓ニ有之由、開作已後今ノ新道往還トナリ」とあるので、それ以前の街道は薬師寺の山門前の道を本陣跡の裏手へ下り、山沿いに西へ延びていたと思



今津本陣跡

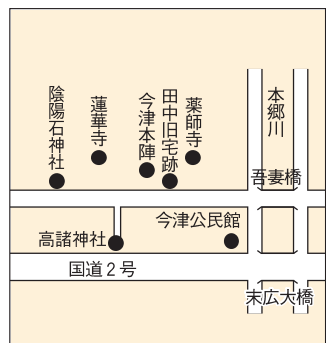
われます。新道開作には、万治2年（1659年）の高須新涯の造成が大きな契機となりました。

さらに西へ進むと、左に「お剣さん」の名で親しまれる高諸神社の鳥居が見えてきます。旧暦6月28日の祭礼には「汐間の市」と呼ばれる1週間の市がたち、多くの参拝客でにぎわいます（現在は新暦8月第1木曜から）。白鳳年間に今津の海浜に漂着した新羅の王子の伝説を伝え、剣大明神として祭られていましたが、明治5年（1872年）に高諸神社（延喜式内の古社）を合祀しています。本殿の周りの巨岩は海岸の岩場を思わせ、裏手にあるハクの巨木は市の天然記念物に指定されています。街道をはさんだ向かいに、脇本陣として利用された新熊野山西方院蓮華寺



高諸神社

があり、本堂内に書院造りの上段の間が残っています。文明3年（1471年）6月16日付けの尾道『西国寺文書』に「今津蓮花寺栄尊」の名が見え、古い歴史を物語ります。街道に面した山門（表門）のほかに東門があつて、まっすぐ延びた参道は本陣跡にぶつかり、本陣との強い結び付きをうかがわれます。蓮華寺の少し西には、陰陽石神社があります。江戸後期の随筆『甲子夜話』は「備後国今津宿のはずれ田中に石の群轉ず、其中に二大石ありて相對す」と記していますが、現在は水中に没して見ることはできません。盛時は東町・西町と二町で形成され、旅人の往来が絶えなかつた今津宿も、年々その面影が失われていくようです。



（2000年2月号に掲載）

松永の共同井戸①

干拓地の飲料水に

松永の歴史は本荘(庄)重政の塩田開発に始まります。1667年に松永塩田が完工すると、人々が移住を始め、東町と西町が形成されましたが、一番の悩みは飲料水でした。

井戸を掘っても、干拓地のため塩分が混じり飲用に適しません。1763年には、「當村呑水殊之外不自由」で「神村川之内」から水を引いているが、「水溜場所」を普請したので、50人を都合してほしいと藩に願い出たという記



判屋河

録が残っており、当初から水道を引いて、飲料水を確保していたことが知られます。

東町では、水源を羽原川に求め、神村地福地から取水し、判屋河、新河、鍛冶屋河と呼ばれる3か所の溜井戸に送水する方法がとられました。

判屋河は東の踏み切りの南にあり、玉垣の石柱には「大正五年丙辰飲用水



新河



鍛冶屋河

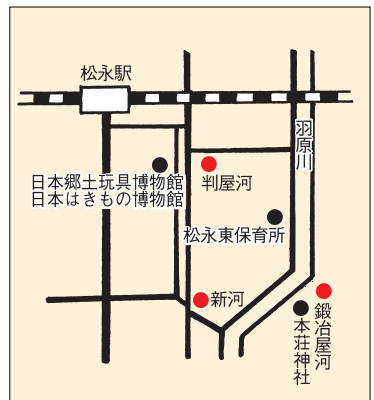
道判屋井戸改修」と記されています。

新河は延谷屋橋のすぐ西にあり、1912年の大改修を記念した「新川水道寄附碑」と、1920年の「水道復舊工事記念碑」が建物に隠れるように建っています。1951年には大型ポンプを据え付け、多くの家庭へ送水していました。

鍛冶屋河はわき水も利用したと考えられますが、現在「松永上之町共同井戸」として、市の史跡に指定されています。

このように、どの溜井戸も住民の努力によって繰り返し改修を重ねながら、大切な飲料水を守ってきたのです。

(2000年7月号に掲載)



松永の共同井戸② 土管を利用した溜井戸

松永東町と同様、西町では本郷川の水源地から取水し、町内6か所の溜井戸に送水していました。

しかし、需要の増加で送水が追いつかず、1911年（明治44年）には末広大橋のすぐ上手に原井を掘削し、本郷川の水を引いて水源としました。その時の記念碑の表には「原泉混混不舎晝夜 浪華 寺西易堂書」、裏には「明治四十四年辛亥十月十七日竣工 松永西町飲用水原井改鑿員」と刻まれています。原泉の井戸という意味で原井と



原井の記念碑

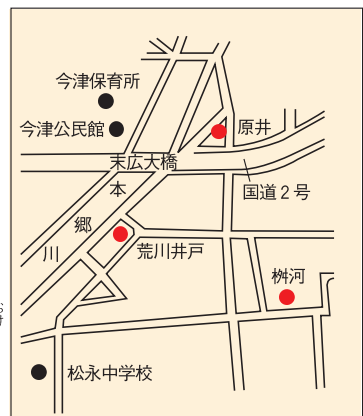
名付けたのでしよう。

原井からは土管を通して各溜井戸へ送水されました。その中の一つ「榎河」は、入川が南から内小代へ延びた築切の潮溜近くにあり、1924年（大正13年）までは、この榎河から水舟で塩田の各浜へ飲料水を運んでいました。その後は水道が各浜へも引かれ、1941年（昭和16年）には新しくできた天保山の合同製塩工場まで延長されました。

一方、本郷川の地下水を利用した荒川井戸が、末広大橋から東側の土手を少し南へ下ったところにあり、貴重な飲料水として使用されてきました。どんな早魃でも涸れることがなく、今でもあふれるばかりに清浄な水が湧き出



荒川井戸



しています。かつては、桶や荷車で飲み水を運ぶ姿が見られたといえます。今日では、東町も西町も上水道が敷設され、井戸水の利用もほとんどなくなりしましたが、河と呼ばれた溜井戸が町内の各所に残っています。

（2000年8月号に掲載）

松永の入川①

松永の発展に大きな役割

松永駅南口のロータリーの南端に、松永の名付け親であり、松永塩田を拓いた本庄(荘)重政の銅像が建っています。右手は南の干拓地を指差し、大仕事を前にした意気込みが感じられます。重政は、柳津・高須の両新漕を完成させた後、萬治3年(1660年)、松永干拓に着工しました。その2年後には潮止め工事が完成し、続いて塩田基盤工事、釜屋工事に着手しています。



湯屋ヶ橋から北の眺望

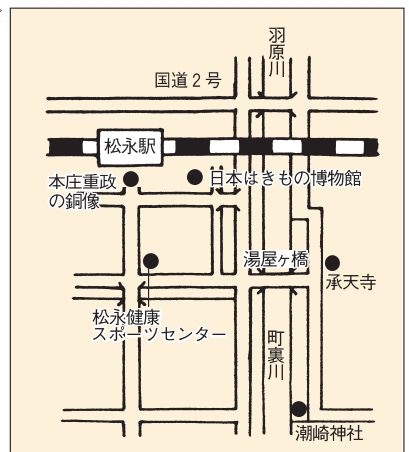
寛文7年(1667年)に、銀百枚を運上(営業税)として藩主に献上していることから、この年には工事は完工し操業が始まっていたと思われます。

こうして「町は七島 入江の枝に 四十八塩田の あれや塩烟」と歌われた東西15丁(約1.7km)・南北10丁(約1.1km)の松永塩田が完成しました。各浜へ海水を送るため、各島の間を縦横に走る8条の入川が造られ、潮廻しの水路が干拓地の西と北を巡って羽原川にぶつかり、今津・神村との境を区切っていました。

塩田従事者の居宅や商家は、羽原川下流の町裏川沿いに軒を連ね、上之町、中之町、下之町の一筋町が形成されました。町から塩田へ渡るには、湯屋ヶ



本庄重政の銅像



橋が唯一の橋で、今でも橋からの眺めは当時の面影を残しています。

江戸時代までの入川は、四十八浜への海水導入と塩・燃料の運搬に使われていましたが、後には利用の幅も広がり、松永の発展に大きな役割を果たすことになりました。

(2001年3月号に掲載)

松永の入川②

歴史を見つめ大きく変化

前号で紹介した湯屋ヶ橋を渡ると、

松永塩田七島の一つ神島です。その北に長和島、西に本郷島、今津島、徳島さらに西に稲荷島、小代島があり、現在も、ほぼ当初の姿を残しています。

「町は七島架け橋七つ 恋の架け橋数知らぬ」と歌われたように、元禄13年(1700年)の検地時の絵図には、入川に架かる七つの橋が描かれていま



整備された入川

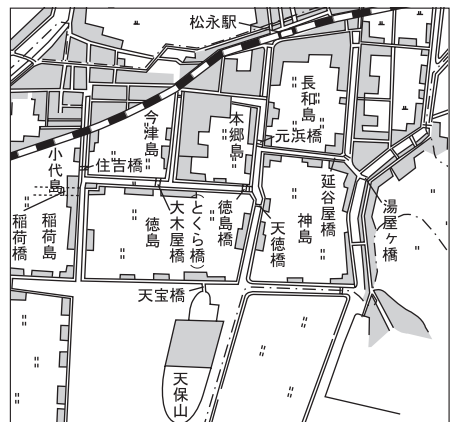
す。現在は埋め立てや改修によって、入川の様相は大きく変化してしまいました。

かつての入川の幅はほぼ4間(7.2m)から8間(14.4m)で、広い所は11間(約20m)もありました。

文化元年(1804年)から、塩釜の燃料に順次石炭を使い始めると、入川は石炭運搬船が行き交うようになりました。燃えかすの石炭がら捨て場は、そのたい積によって天保年間(1830~1844年)に独立した島となり、天保山と呼ばれました。



入川の入り口



松永塩田七島(1952年刊行『松永町誌』から)

明治に入り下駄の生産が始まると、入川は原木の運搬にも利用されるなど、松永の木工業の発展に大きく貢献しました。かつては、入川から各工場へ原木を引き入れた痕跡を見ることができました。

このように、入川は松永の経済活動を支えてきましたが、近年は塩田跡が住宅地や商業地となり、生活排水や汚水による汚染が問題となっています。現在、環境整備が進んでいますが、松永の歴史を見つめてきた入川も、大きくその姿を変えようとしています。

(2001年4月号に掲載)

大場山城跡

古志氏の居城跡

松永湾へ注ぐ本郷川をさかのぼり、新幹線と山陽自動車道の高架を過ぎると、谷への入口左手に、地元で「城山」と呼ばれている大場山城跡が望めます。城名は、鎌倉時代前期、大庭（大場）氏の築城に由来するとも言われます。

戦国時代には、出雲を本拠とする古志氏が居城し、「古志城」とも呼ばれたようです。当初は尼子方に属し、永正9年（1512年）大内氏の命を受けた毛利興元に攻められたことが、江



大場山城跡遠景

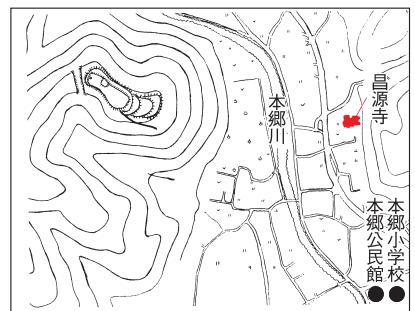
戸後期の地誌『西備名区』に見えます。また、同書には、大場山城最後の城主、古志清左衛門について、強力で聞こえ、毛利方に属して数々の軍功をあげたが、天正年間の初め（1580年ごろ）、謀反の風聞があり、安芸国吉田に召されて誅せられた、と記されています。城跡から本郷川をはさんだ東に、菩提寺の昌源寺があり、清左衛門の位牌や一族の墓石が伝えられています。

城山へは南の谷口から登れます。畑の間をぬって山に入ると、ジグザグの山道が頂上まで続き、途中に堅堀や郭の跡が確認できます。

主郭は最大幅20m、長さ90mの長大



大場山城跡からの眺め



な平坦地で、西端には土塁が残っています。土塁のすそには井戸跡があり、その西には、幅15mの深い堀切が、西方の尾根との間を断ち切っています。主郭の北には帯郭が巡り、東にはさらに3つの郭が階段状に築かれています。現在は樹木が茂り、あまり展望がききませんが、かつては本郷はもとより、東村・今津・神村一帯を眼下におさめ、敵の動きを監視する山城として、重要な役割を果たしたものと思われます。

（2001年11月号に掲載）

東村町かかし祭り 豊作を祈り、豊作に感謝

かかしを田の神のご神体と考え、収穫感謝祭で祭る行事は全国各地にあります。東村町には、戦後、広東文化学院という、農業の担い手を育てる学舎がありました。その先生たちが、農作物の豊作にとって一番の功労者であるかかしにお礼をしようと呼び掛け、始まったのがかかし祭りです。

当初は青年団が中心となり、農業を生かした祭りしようとして、農作物の品評会を始めました。この企画が、農作物の研究グループを生み、品種改良に



ひがし大ちゃん

よって収穫が増し、質の良い作物が作られるようになりました。

しかし、これだけでは祭りらしくない、「たんじり」を出そう、仮装行列もやろう、踊りも…と夢は次々とふくらみ、今日の祭りの形ができてきたのです。現在、「たんじり」は出ていませんが、かかし祭りの原形は、青年団の若いエネルギーが作りあげたといえます。

かかし祭りは、毎年12月の第1日曜日午前10時から午後3時15分まで東村小学校で行われます。小学校までの道には、田んぼや道路脇にかかしが



仮装かかし

立ち並び、グラウンドでは、高さ6mのメインかかし「ひがし大ちゃん」が迎えてくれます。

午前10時30分から小学生の太鼓で幕をあげ、午前11時30分から各町内会や地元福祉団体の製作した仮装かかしが入場します。午後は、町民の踊りやかかし着付け競技、福山大学の三蔵太鼓など多彩な催しが予定されています。

これからも、東村町のかかし祭りは、農村の良さを生かし、農作物に感謝する町をあげての年中行事として、地域づくりに貢献していくことでしよう。

(2008年12月号に掲載)



潮崎神社の由来 塩浜の守り神

潮崎神社は松永町にあり、祭神は神武天皇外四神を祭っています。社伝には神武天皇東征の時、岸边の柳の木に船をつないだことから「柳津」の地名が付き、そこに社を建立したとあり、この神社はもと柳津村の剣平に鎮座していました。

1663（寛文3）年、本庄重政が松永塩田を築造したとき、重政が自ら不動明王像を彫刻して合祀し、「塩浜の守り神」として現在地に移しました。



社殿

「剣大明神」と称されてきましたが、江戸時代には単に「明神さん」と呼ばれていました。

1872（明治5）年に神仏分離により村社となり松永の総氏神として現在まで祭られています。塩浜の鎮守として海の守護神である住吉神を祭っているため、現在は「潮崎大明神」と称されています。

祭礼は「松永煙火祭」と呼ばれ、旧暦8月27、28日に行われていました。神輿が船で西町稲荷神社の御旅所へ渡御する時には、各浜や御供船から数百発の花火が盛大に打ち上げられ壮観だったそうです。この煙火は本庄重政の本庄流砲術の名残とされています。



潮崎神社の石造物



かつては海に面し、西には塩田、南には遺芳（松永）湾を隔て浦崎と相對し、遠く予州の山々を望むことができたこの神社も、埋め立てによって景観が変わり、船からの祭りは行われなくなりました。

現在、例大祭は毎年10月の第2土・日曜日に行われており、遷座350年にあたる今年には、稚児行列など新たな行事も加わって盛大に行われました。塩浜の守り神は今でも人々の厚い信仰を集めています。

（2009年12月号に掲載）

